

この手記は令和5年5月に大峰山系七曜岳付近で遭難した男性によるものです。

男性は七曜岳に登る予定で入山しましたが、行程遅れのため、登頂を断念し、水簾滝に立ち寄ってから下山することを決めました。

そして、水簾滝付近で滝に近づくために、一旦、登山道から外れて斜面を下り、その後、登山道に登り返そうとしたところで道に迷いました。

登山道に戻るルートを探そうと斜面を歩いていたところ、滑落して身動きが取れなくなり、携帯電話で救助を要請しました。

救助隊が捜索に入りましたが、捜索は難航し、午後7時頃ようやく男性の声が確認出来る位置まで近づきました。

しかし、そこは登山道から外れた急斜面であり、日没となってしまうため、捜索を中断、お互いの姿を目視出来ないまま、男性と救助隊員はビバークすることになりました。

翌日、夜明け後に捜索を続け、ようやく救助隊が男性を確保し、無事に下山することができました。

男性は登山歴約50年のベテランで、今回遭難したコースも何度か登っておられました。

令和5年5月10日（水）

朝5時に自宅を出て、7時半頃に和佐又口の駐車場に到着し、8時には歩き始めました。

この日の天気は最高。気持ちのいい歩きになりそうとワクワクしながら歩きました。

大普賢岳周回コースは人気があり、いい山で何回も歩いたコースでした。この日は七曜岳ピストンの予定でしたが、体力的に、スローリー登山と決め、水簾滝でUターンをしようと思いながら歩いていました。

和佐又山のコルから大普賢岳方面に行かないで、左の方へトラバースしながら平坦な登山道を2時間半程で底無井戸に着き、クサリ場を下降すると水簾滝の水の音が聞こえました。これ以上、下降すると、又、登るのに、体力的に大変だと思いこのまま水の音だけを聞いて、Uターンする事にしました。10時半頃だったと思います。

そして登っていると、すぐに今、下って来た道ではないと思いながらも歩き、すぐに来た道にもどれると信じ歩き続けました。

ところが、体力、思考力の低下、焦りも重なり、上へ上へ登る事2時間以上、歩いたと思います。今、来た道がわからなくなり、迷った事が不思議でなりません。

登る程、傾斜もきつくなり、前方には岩本新道と笹の窟の大岩があり、登る事が出来ません。左へ、横へ横へと歩きましたが絶壁で行けなくなり、そして、少し下る時に10メートル位、すべり落ちました。

周りを見わたすと、下は崖、上は急峻な傾斜で身動きがとれない様な場所でした。この場所では携帯電話が繋がらないと諦めながらも、自宅の方に電話をすると繋がったのです。「よかった」と心の中で叫びました。電話が繋がらなかったら死んでいたと思います。

そして110番しました。それから救助を待つ事になります。

その場は救助が難しいとの事で、そこで一夜を過ごすことになりました。夜になって隊員の方々のライトが見えたので、すごく勇気をもらい、私もがんばらなさいと思いました。私のいた場所はスペースも狭く、傾斜もあり、どういう形で救助してもらえるのか、色々、考えながら過ごしました。大きな月も出て明るく、寒かったですけどなぜか夜が明けるのが早く感じました。この事も不思議です。

令和5年5月11日（木）

一夜明けると携帯電話の電池が無くなっていました。

すると下の方で人の話声がするので隊員の方だと思ったんですが、これからは私の幻覚だと思うのですがその事を書きます。声のする方を見ると年配の男女の人が木の葉の間から見えたんです。早速「オーイ、オーイ、聞こえたら返事して下さい」と何回も叫びました。最初は返事はありませんでしたが、何十回目かでその男の人が「ウォーウォー」という様な声で叫んだんです。下には人工的な整地がありそして網の柵などもあり、人がいる様な感じでした。

後に隊員の方に言うと、そこには誰もいないと言われ、このことは私の幻覚だったんだと思うようになりました。しかし、不思議でなりません。それから不謹慎ではありますが、すべり落ちた時は楽観的な気持ちでいましたが最近になってからは死んでいたかと思うと夜も寝れない事もあります。

最後にこの事を思い出す度に、こんなに恥ずかしい事はありません。中高年になると、体力、思考力の低下、過信、思いこみ、そして、いろんな体の機能の低下が進み、適切な判断が出来なくなるように思います。

私も「石橋を叩いて渡る」ような登山を何十年もしてきましたが、本当に残念、恥ずかしい限りです。山は私の癒しの場所であり、今回の体験を忘れぬよう、肝に銘じながら近くの山で登り続けたいと思っています。

警察、消防の総勢36名の隊員の方々、命をかけて救助をして下さり、感謝の気持ちで一杯です。

本当に有り難うございました。